

- (1) ΔZ_s のような変化量の場合で平均場を修正すること
- (2) FAX で送られ ω 場を利用することがよいだろう

本庁電子計算室の鍋島泰夫プログラマーに厚くお礼申し上げる。

う

発達の予想については4層バロクリニック予想を参照することは勿論であるが、

- (1) 波数分析と強風帯解析からの傾向不安定性の強化
- (2) ζ_s (又は ΔZ_s) の地上低気圧中心との距離の変化
- (3) 300mb のような対流圏上層の強い渦度移流
- (4) 対流圏中層における温度場と気圧場の「ズレ」の変化

などにも注意することがよいと思う。

終りに、ご校閲をいただいた矢木予報課長および ω 、 ζ などの電子計算機による計算資料を送っていただいた

文 献

- (1) P. D. Thompson, 1953: On the Theory of Large-Scale Disturbances in a Two-Dimensional Baroclinic Equivalent of The Atmosphere, Quart. J. R. Met. Soc., **79**, 51~69.
- (2) 長井達夫, 1961: 500mb 面における強風帯の変動と低気圧の発達について (第1報), 研究時報, **13**, 238~242.
- (3) 安田清美, 1960: 1960年1月16日の低気圧の異常発達について, 天気, **8**, 14~21.
- (4) P.D. Thompson, 1957: Statistical Aspects of Dynamics of Quasi-Nondivergent and Divergent Baroclinic Models (reprint)

【新書紹介】愛知県の気象

A 4 版 207頁 気象協会名古屋支部発行 定価1,000円
各府県ではその必要があって、県の気候誌を出版している。評者は仕事上から、それらほとんど全部に目を通しているが、こんど出版された愛知県の気候誌「愛知県の気象」は、そのなかでも出色のきばえである。

気候誌の編さんは経験した者でないかわからないが、とにかく労多くして、そのわりにでき上りは平凡になってしまうものである。従来出版された府県気候誌をみても、たいへん努力をしていることはわかるが、利用者の立場からみると、なにかもう一步のつっこみ方がたりなく感じさせるものが多い。それかといって、あまりにこりすぎると、利用者の小さい統計にあまりに身をいれすぎたひとりよがりのものになる危険性がある。

需要の多いデータを利用しやすい形で提出すること、これが気候誌編さんの指導原理であるが、これに十分に対応できるためには、2つのものが特に必要になると思う。ひとつは、気候データの需要者がなにを欲しているかをほんとうに知りぬく現場の経験と勘である。いまひとつは、新しい調査結果や統計方法をとり入れる勉強と努力である。この2者が兼ねそろえないとよい気候誌はできない。その意味で、名古屋地方気象台は大谷和夫氏をはじめとするよい編さん者をそろえ、府県気候誌の

よい手本を作ってくれた。

本書は第1編から第5編までからなり、それぞれは、気候概説・気候表・気象統計図・気候図・災害年表となっている。第1編気候概説はさらに地勢・愛知県の気候の特徴・季節の気象・気候の長期変動・気象災害・地震災害の6節に分けられているが、気候をシノブチックにみていこうとする最近の考え方に沿っている。

第2編気候表で目につくことは、利用度の低い統計値は、かりにルーチンで行なわれていても思い切って切りすてたことで、利用度の高いものを生かすためには当然である。

第3編気象統計図は、編さん者のもっとも苦心したところと見受けられる。日変化や天気階級別度数を図にして、利用しやすくしてある。特に図による表現は、感覚が新鮮でよい。料理でもみだ目にきれいなことが食欲をそそってうまく食べさせるコツであるが、気候図表類も同様で、表現が泥臭くてはいけぬ。従来気候誌のなかには、この点にたく留意を怠りがちのものも見られたが、本書では編さん者と印刷者がよく協力して図を作ったあとがみられる。

本書のような府県気候誌が、どの府県にも作られたらと評者は願ってやまない。 (斉藤 鍊一)